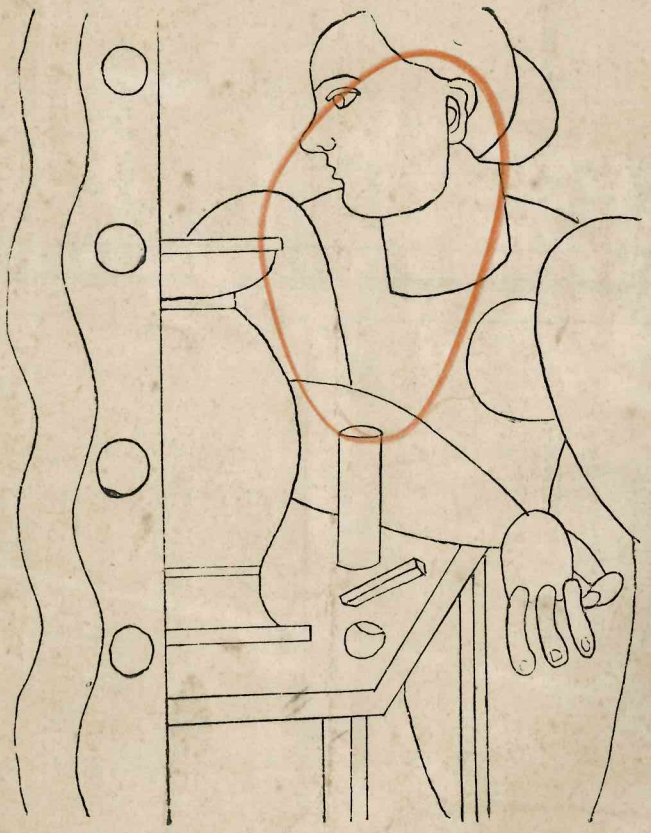
日本詩壇



第十四卷 **第138號** 第五號

日本詩壇
昭和二十四年六月三十日第三種郵便物認可
昭和二十五年四月二十五日印刷納本
昭和二十五年五月一日發行
第十四卷第五號（毎月一回一日發行）
定價四拾圓

智識層の健眼と美眼には
カネボウ「プラシン」主劑の
壯眼水
＞中西武商店＜

風に熱に咳に
改源改源改源
みんな樂しく
お茶で服む改源
美味改源（カイゲン）
《中西武商店》

白鳥省吾詩集
灼熱の氷河
四六版 百二十頁
定價 百圓
送料 二十圓
著者十八冊目の民主主義の最高の詩集
直接註文に限り著者署名す
千葉縣佐原町田宿水郷印刷社內
發行所 詩精神社

胃腸藥
中島正露丸
大阪府吹田市浜之堂一〇七〇番地
大幸藥品株式會社

「コギト」の思ひ出

田中克己

近刊の中部日本新聞社発行、本多私五氏等「世界文学辞典」をひらくと「コギト」の項に

○同人雑誌　昭和七年創刊　はじめはドイツ浪曼派、ステファン・ゲオルゲ一派の詩運動に刺戟されて、保田與重郎、田中克己、三浦常夫、松下武雄などの主として詩人によつて創刊されたが、コップ解体の時期にあたる昭和八―九年のいわゆる不安の季節は、新しい文学的立場を模索する知識人達を糾合するにいたり、中途より萩原朔太郎・亀井勝一郎・芳賀檀・山岸外史・小高根二郎・伊藤信吉・伊東静雄・服部正巳・森亮・立原道造・檀一雄・中河與一・緑川貢・横田文子・中谷孝雄などの作家達が参加して、やがてひとつの大きな流派「日本浪曼派」を形成する母体となつた。保田與重郎の「戦冠詩人の第一人者」「日本の橋」などは本誌に掲載され、戦時中の民族主義、王朝文化復活の氣運に乗つた。その流れは昭和十九年までつづいたが、その他にも服部正巳「ニーベルンゲン」全譯、森亮「印度古詩」伊藤信吉「魯迅」などの業績をのこした。一四一号まで刊行して、同人雑誌としては最も純粋かつ生命の長いものであつた。

とある。この辞典は正確ことに「およぶかぎり慎重を期したつもりであるが」「思はぬ脱漏誤謬もまぬがれてゐない」（同書序文）ことは編纂者自らも認めてゐられるので、他日この辞典の改版の際の訂正のためをも兼ねてコギト同人の一人としてこの文を草して置く

今から二十年以上まへの昭和三年に馬鹿な一高校長が当時の異例であつた文科の入学試験科目に数学なしという思ひ付きをした。これに應じて集まつた数学の不得手な連中のより抜きが我々のクラスであつたのだから、開校以來もつともロマンチックな組になつたのは当然であろう。該校長がこれに懲りて翌年から文科にもまた数学を課することになつたのはこれまた当然である。余事はさておきこの連中が集まつて「かぎろひ」という短歌雑誌を作つた。号を重ねること十号、目出度く御卒業になつたが、文学好きの癖は止みそうもない。大体は東大に集まつたが京都の田辺哲学を桑つてこれに加わらなかつたのが松下武雄と中島栄次郎。東京組は肥下恒夫をトップとして保田、杉浦正一郎、梶野忠夫、薄井敏夫、服部正巳、室清、それに田中と都合十人であつたが、毎月十円づゝ金を出しあつて、今度は謄写版でなく、活字の雑誌を出そうということになり、名まへは合議の上、保田の提唱した「コギト」と定まつた。これが我々の大学一年だつた昭和六年の末で、実際に第一号が出たのは翌年の三月である。ドイツ浪曼派を目指したのは事実だが、ゲオルゲの詩運動を目指したというのはどうか、保田にはその氣があつたか否か、筆者はまだたしかめて金ない。当時の大学生の一ヶ月の学費生活費を含めて平均五六十円、その中からの十円は大会である。しかしもとよりこれで足りる筈がないので、不足は当時数十町歩の田地をもつていた肥下が出すことと暗黙の中に定まつた（彼はいま農地改革によつて殘つたわづか五反の田地を耕し食つている）。同人の仕事はまだ外にもあつて、出來上つた雑誌を手分して小賣店にもつてゆき、一ヶ月委託するのである。筆者の担当は杉並區、いやな顔する店主に頭を下げて三册五册と店頭に置いてもらう、いまの文学青年にこの思い出ありや、なしや。

さて二号が出て一号の回收にゆくと、思いの外に賣れていた。いや実はそのまへに五册置いたところで一册になつているのは氣がついていたがたしかに賣れているとの自信もなかつたのが七掛かの代金をもらい（なくなつたのではないかといやな顔する店主もあつたが）みな発行所であつた肥下の家に集まつて報告する時はうれしかつた。この「自由に」賣れていた本が創刊号で六十三册だつたか。アララギの創刊号よりはよく賣れていたのである（齋藤茂吉先生のアララギの思い出参照）

辞典によれば詩人を主としたそうであるがこれはうそであろう。創刊号には保田、相野薄井、杉浦など小説を書き、詩を書いたのは中島と田中とだけである。筆者は実ははじめ評論！を書いてもつて行つたのだが、発行のおくれている間にみなの顔色を見てひつこめお茶にごしに詩を書いたのである。この詩で四十歳まで過すことになる覚悟などもとよりなかつた。二号もそんなわけで筆者は詩の外に佐藤春夫論を書いた。保田、中島は論説を書き、小説は保田、薄井、肥下、室、相野が書き、ようやくコギトらしい趣が具はつた。当時同時代人として覚えているのは早稲田の石川達三、田村泰次郎「新三田派」の北原武夫「麺麭」の神保光太郎、仲町貞子、みな二十代で雑誌もいつまでつゞいたか。この頃の同人雑誌で大阪から出ているのに「呂」というのがあり、そこに伊東静雄といういゝ詩を書くのがいることを見付けたのはやはり筆者だつたか。コギトの評判は賣行以上に氣になつたが、寄贈した百人以上のみずしらずの先輩中、お祝ひを云つて寄こしたのは、寄贈創刊雑誌には必ず激勵の辞をくれるという親切な（これもずつと後でわかつたことだが）某先輩一人だつたか。しかし四、五号も出すうちには見てとつてくれた証據に、保田、中島、松下の三評論家そろつて岩波の「思想」から原稿依頼があり、この時、中島が書いたのは「詩の論理と言語」だつたか、少年にしてこれほど見事な論文はそのちに知らぬ。辞典が中島をぬかしているのは、ルソン島で戦死した彼のためにも殘念である。筆者は不本意ながら詩を書きつゞけていたが、三号だつたかの詩を藤田廉が雑誌でほめてくれた。うれしかつた証據にいまだに忘れられない。もつとうれしかつたのは大阪方面の「配本」に当つている中島が夏休みの帰郷のとき傳へてくれた「住吉中学の先生で毎月一册本屋で買つてくれ、本屋のおやぢに田中というひとの詩がいゝからしつかりやるよう云つてくれと云うてる人がある」との言葉である。意を決して本屋にゆきその先生の住所と名を訊ね、中島と一緒にこわ〳〵訪ねてゆくと、これが「呂」の伊東静雄で、当時新婚、五六才の年長がなんと年寄りに見えたことか。伊東はこんな縁故で「呂」がつぶれたあとコギト同人の一人に加はり十五号に「病院の患者の朝」を

のせたをはじめとして、殆んど毎号のせた。これが昭和十年に出て萩原朔太郎に絶讃された「わがひとに與ふる哀歌」の諸篇である。

伊東より先に高等学校の一年先輩の石山直一、小高根太郎の二人が同人に加はつた。三浦常夫はこの時、小説、評論と何でも來いの才子、美術評論家小高根太郎のペンネームである――弟二郎の加入はその一年後であつたろうか。

昭和九年に肥下を殘してみな卒業（肥下は卒業の意義を認めず卒業論文を提出しなかつたのである）。筆者は帰郷して教師となりその他の同人もいま以上の就職難時代に職の有無にかかはらず文学を忘れたような顔をする中に、肥下、保田の二人は決然「コギト」繼續を主張し、編輯事務以下の雜用すべてを担任した。たゞし怠け勝ちの同人への手紙ハガキの叱咤激勵は功を奏せず、今度は同人ならぬシンパの寄稿を求めることゝなつた。その人たちの名まへは「辞典」がわりあひ丹念に掲げてくれているが、抜けているのが桑原武夫野田又夫、五十嵐達六郎などの卒業した高校の先生たちの外に、津村信夫、辻野久憲、中原中也、本庄陸男、緒方隆士、磯花佐知男、藥師寺衛らの故人であるのは、死ぬことは忘れられることだと思はれて悲しい。

「コギト」への寄稿だけではいさぎよしとしない青年文学者の集まりなる「日本浪曼派」の結成の宣言が「コギト」にのり出したのは、コギトの第三十号「ドイツ浪曼派特輯号」であつた。序でながら「辞典」の「日本浪曼派」の項でも編輯同人六人の中、中島栄次郎一人がぬけている。人に憎まれることのなかつた中島はそれだけ忘れられ易いのかしら

特輯号としては、この外に第四十二号が「芭蕉特輯」号で萩原、芳賀、三好、津村、高村光太郎、小高根、中島、生島遼一、北川冬彦、亀井勝一郎、池田勉、神保、宮田戊子、岩田潔、保田が書いている。これだけの原稿を稿料なしで集め得た「コギト」を羨ましく思うのが近頃の出版界ではなかろうか。

さてコギトはその後も病氣から癒つて書き出した小説家伊藤佐喜雄、同窓の竹内好、大学を卒業した山田新之輔、池沢茂、長尾良を同人に加へて、欠刊なしに昭和十九年までつゞいた。掲載された作品の代表として服部の「ニーベルンゲン」は間違なし。森亮の「印度古洲」はアラビヤ人の作なる「ルバイヤット」であろう。これは竹友藻風に劣らぬ名譯で、筆者自らもシンガポールで原典をひもときながら、その譯を思ひ返すのを常とした經驗をもつ。たゞ伊藤信吉の「魯迅」は不審である。伊藤とは筆者も萩原朔太郎を通じて知合ひではあつたが、コギトに書いてもらつたか否かさへ記憶せぬ。いま手許にコギトのそろいがないので或いは書かれたかも知れぬがこれをほめてもらへば伊藤自ら羞かしがろう

十九年戰局苛烈となると、それまでほそ〴〵と營業雜誌と同じく紙の配給を受けていたコギトには今後配給をとめ、現配給量を文藝日本もしくは文藝世紀に讓渡せよとの当局の指図があつた。同人雜誌の本質を理解せぬこのお指図には肥下、保田以下憤慨したが仕方ない。この時、戰時下性神經衰弱に罹つていた筆者の反対を押し切つて肥下は独力、印刷所の余り紙で八頁四つ折のパンフレットを出すことをつゞけた。時に昭和十九年五月、東京へはそろ〳〵空襲がはじまつていて、肥下も筆者も警防團に徵用されていたのであるしかし肥下の志も空しく九月、第百四十六号に至つて印刷すら燈火管制のため不可能となつた。肥下、保田、筆者そろつて召集を受けたのは翌年三月、東京の半ばが燃え上る前後であり、中島の戰死はその二ヶ月後、早く死んだ松下はもとよりコギトの思ひ出を書ける人間も少くなつたので、けふこれだけ書いておく。

「椎の木」回想

山本信雄

「椎の木」の想ひ出と云はれても、手許に一册のバック・ナンバーも持合せていない僕には書く資格がないかも知れない。まして「椎の木」のあつた頃の詩壇の背景や、潮流や「椎の木」の果した役割などについて触れるデータも何もない。

幸せなことに書架の中に百田宗治詩集「蓬萊」がある、その後書の文章に

「椎の木」を創刊したのは昭和元年の十月で、創刊号には伊藤整、丸山薫、山本信雄三好達治、飯島貞、長沢三郎などの諸君が書いている「雪明りの路」という詩集を出して北海道から上京して來た伊藤整君が笈をとき、大学の制服をつけて三好君が初めて訪ねて來たのもその上町の家であつた。

（以下略）

その頃と云へば、前年まで大阪の住吉公園の百田さんのお宅へ通つていた僕が、百田さんの上京を頼つて高等学校の受験もあきらめて三田の文科にはいつた年であつた、暫らく一緒に大森子母沢で住んでいた。それから百田さんは殆ど中野に住まはれ、中野ではその附近で二三度引越されたように記憶している。丸山薫氏や菱山修三氏や阪本越郎氏などに会つたのもその家であつた。

第一次の「椎の木」は翌年の九月頃まで十一册を最後に打切られた。そのこともこの「蓬萊」の中に誌されている。そして第二次の「椎の木」が出始めたのは昭和七年の一月になつている。大阪の山村酉之助、高梨和夫、内田克巳、藤村青一、高松章、住江雪夫、濱名與志春の諸君などが活躍され、我々も毎月心齋橋の明治製菓の二階で（椎の木）例会を開いたものである。古い僕のアルバムの一頁にその頃の記念撮影の写眞が二枚殘つている当夜のお客様の三好達治氏を圍んで藤村君、山村君、西尾牧夫君、それから珍しく一人女流詩人を交へて十一人の集ひであつた。もう一葉のは、來阪中の百田さんを迎えての「椎の木」同人を中心にしての晩餐会であつた。この時は十九人の集りで今眺めても名前を想ひ出せない人々がある。その中にあつて「日本詩壇」の主宰者として大いに氣を吐いていられた吉川則比古氏や京都の詩人であり畫家の天野隆一氏の顔が見えるのも、その夜の歡迎会が中々盛んだつたことを想はせる。

「椎の木」編輯と共に、出版を始められたその頃の百田さんが最も得意の時代ではなか

つたか知らん、三好達治氏の「南窓集」や菱山修三氏譯のヴァレリイ「海辺の墓」などを手始めに青柳瑞穗氏譯「マルドロオルの歌」や「西脇順三郎詩集」の上梓は「椎の木社」詩集出版物の白眉と云つても過言ではなかつたろう、比較的小型の詩集の多かつた中にあつて「西脇詩集」だけは変型の大型で、表紙もカーマイン色の立派なもので、僕は限定版の（NO・1）を手に入れて有頂天だつたのも当時の日記に書き留めてある。

先年物故した高祖保君の処女詩集「希臘十字」と僕の「木苺」とが同時に椎の木社から出て銀座で出版記念会を開いて貰つたのも、懐しい想ひ出となつてしまつた「椎の木」を語るには高祖君などが最適任の人であるかも知れない、山村酉之助君もその後期の編輯に携わり骨身を惜しまなかつた努力と熱心さは賞されていゝ。廢刊二、三号前の「椎の木」であつたかに、僕は「百田先生と風知草と僕」という「詩人印象記」を物したのを憶えている。毎月そういうものを連載していたのであるが岩佐東一郎氏は何でも堀口大学氏のことを書いていられたやうに想う。

前記「蓬萊」が出たのは昭和十八年の秋でもう我國の世相はぎり〳〵いつぱいの險しい処まで來ていた。――それから二年僕は「蓬萊」を手にする最後の詩集として、毎日毎日を血なまぐさい現実の前に一身を曝していた「百田さんはどうされたろう……」いつか遠く北海道の地へ移住されたのを「週刊朝日」か何かの雜文で知つて、何か知ら譬へようもない寂しさを感じた。何故東京の地に頑張られないのだろう……東京なら何とかなるだろうが札幌では手が屆き兼ねる。僕は長大息した。そんな勝手なことを考えているうちにも百田さんはぼつ〳〵詩を書いていられたのである。先年「日來未來派」社から出版された長篇詩集「辺境人」一卷はその所産である。

「椎か木」への回想が甚だとりとめもない身辺雜事的に終つたのを深くお詫びする。

農民詩文學回想

後澤重雄

大正十二年頃であたろうか?、北海道の或小寒驛で待合の壁に貼つてあるポスターを見て驚いたことがあつた。それには若者よ東京に出るのは待て、都会にあこがれて出ても人間があふれていて就職の道も生活の道も立たないというような意味の警告文が記されてあつた。農産物は安くて他の物價や小作料は高いし、都会はネオンサインに飾られ歡樂の巷として、誘峨燈におびき寄せられる峨のように若者が流れこんで膨脹するので、農村は年寄はかりの荒廢に陷ろうとする何か異狀を感ずる時代にあつた。

土えの志向は明治中期以前から培はれていた。美文的自然觀賞ながら德富蘆花の自然と

人生により、又更に生活に深く食入つた土よりの原始性を強く現す長塚節の土や、或はツルゲーネフの猟人日記、國木田独歩の武藏野等から、文化的生活面の自然觀に志向の位置附をされて育つていた吾々であつた。この素地に農民の現実を展示されて反應なしにはいられない。自然詩から農民詩え展開せずにいられなかつたわけである。消費否定から生産強調え、都市否定から田園都市、農村尊重與隆運動え、ザインよりゾルレンえの哲学と共にそれは眞摯な生活者の当然であろう。そしてそれは又中央集權から地方分權え、中央文化から地方文化運動えの展開を伴なつたことも当然のコースであつた。そこに吾々の農土文化運動として、大地主義、重農主義等が標榜されたのであつた。重農主義については生田長江も論文を発表したはずであり、伊福部隆輝、芳賀融君等も書きだし、農土主義、大地主義については僕もしば〳〵書いたものであつた。農民文学については大槻憲二、犬田卯もよく書き、中村星湖、三井甲之等甲斐で農土精神により地方文化運動をしたようである。丁度この頃スペングラアの西洋の沒落が書肆をにぎはし、室伏高信の文明の沒落も出版され、思想的にも相当顯著に生産的農村的傾向が強調される狀態にあつた。

農土の上に農土的な荒々しい生活を描いた有島武郎のカインの末裔など土に次ぐ農土小説と思うが、この頃農民小説もしきりにかゝれ、ポーランドの作家レーモンドの農民など飜譯されるし、詩としても福田正夫氏の麥踏のような、土の中から土の息吹が唄いだされるようなよい作品も発表され、大洪水の約束や花嫁のような詩によつて、土と人間との一体になつた苦惱や歡びを歌つた白鳥省吾氏のその人柄のような大地舍と、そこから発刊された地上樂園に寄る人々は、当時の時代色を詩を以つて現したものであつた。そのうちでも最もユニークなものは國井淳一君の詩であつた。その詩は鈍重な農土の特性を持つた一個の巨大な人間であつた。そこえいくと泉浩郎君や胡桃沢龍吉君の詩は文化生活性があり中村泰二郎君のものは一層自然景觀に富んだ文化性を持つていた。その外歌や民謠の形で表現したのは中村孝助、松村又一君等であつた。三浦關造、山村暮鳥連名で馬鈴薯のような詩を作ろうといつて詩誌発行の相談を受けたのもこの頃だつたと思う。

こんな狀態であつたから消費都市の享樂性に対して、關東大震災は天譴だと說く考え方が強かつた。そんな思想が高まつて地方分權地方文化運動が顯著に具体化し、東京各新聞は有名より無名の革新的な詩作品を原稿料を拂つて多く載せるし、各地に同人詩誌が発刊されて寄贈されてくるのだけでも四十種を越える程だつたから全部では百種を越えたかも知れない。そしてそれ等は地方性と共に農土性も相当廣まつていた。大正末期から昭和の初期にかけて松本に住んでいた頃、佐久地方は特にその他の地方も農民の自覚が目立つてきて、佐久の農民自治会は農村復興運動に活発な活動を起し、たえず狀況の連絡をしてくれたものであつた。小山啓君の如きは、わざ〳〵訪ねてくれ、長野中学の教職をなげうつて美牧が原に一日雇労働者となるという程、農民体驗に徹しようとする人が出て來た。兵庫縣かにいて農民詩に強い熱情を傾けだし、詩誌やたよりをくれたのが植田蹄君であつたその後ずつと発行物を送りつゞけてくれたので黒色テロ事件のあつた時は、任意出頭で特高課長迄呼出しを喰つて無駄足を踏ませられたこともあつた。その後大和から胡麻政和君

が農土詩集をだし、島田君も同名のものを出したが、足に土のついていない文化的な部面を持つたものゝようであつた。石狩の坪松一郎君のものは石狩の土の食込んだ相当な農土詩であつた。ほんとうの農土詩は農民生活の中に食いこんでいく。そして生活と文学と一体となつたところに、記録文学の裏附をするあの一種の眞実感による迫力的み力を生みだす。それが宮沢賢二君や松田甚次郎君の行き方であり、生活の底に没入してそこから革新の道を開こうとする実踐意欲の高まつた時代の風潮であつただろう。

農土主義、大地主義による農民解放農村復興は星うつり霜変つて、農地改革強行の今日大半果されて來たので三十年近くも経過して今更こうした主張の言葉はかびがふいたようでおかしいが、大地の持つこの息吹は永遠のものであり、文化性洗禮以前の土の持つ粗野なあの強烈な原始性を今尚求めるのは、文藝性から賛成できないが、文化洗禮を経てといつても土から離れた小賢しい頭脳の所産でなく、文化洗禮以後の土のそれと一体となつた農土精神の生産性高い力が、その土のリズムとなつて詩に産みだされることが非常に大事なことだと思はれる。而し近頃目につく農土生活の概念的な表現や自然觀賞的な作品は、もう三十年古いといはねばならず、その創造的力量の缺乏に於いて、詩藝術ではあり得ないと断定しなければならない。農民詩文学が興らねばならぬこと、それが眞実の上にクリエートされたものでなければならぬことを重ねて強調したいと思う。

詩人の今昔

古賀殘星

一

遺書というものは人間には必ずあるものだ

これが形として遺ろうが、遺るまいが——死は瞬間にくるか、十年後か、二十年後か、それは不明であるけれど、生れた人間はいつかは死ぬのである。私は菊池寛氏とよく旅をしたが、あの方は心臓が悪く、死を予期していたようだつた。

私は二十年間のサラリーマン生活を辞してペン一本になつたが、外出と執筆に多くの時間を費うけれど、ボツンと空想に耽る時も月のうちに何日かはある。そうした時に、この原稿が発表の機会があろうが、なかろうが、是非書いておきたいものとして、ペンを執つた。詩人として歩いて來た道を綴つていたらこれは「詩人交友記」になつた。私は畑違ひの教育界に育ち、特に師匠というものもなく歩いて來たが、多くの詩人には接して來た。古くは蒲原有明、島崎藤村の大先輩がいる。書いていたら二十枚になつた。これを本誌に寄せようかとも思つたが、枚数が多くなつたことゝ、内容が自己中心になり、文学青年時代の思い出になつたので、そのまゝ二三ヶ月しまつておいた。

ある日、講道館からの帰り、すぐ近くの乾元社に寄つたら、古い文章倶樂部の製本があつた「珍らしいものがありますな、ぼくがこれに詩を書いたのは大正十五年ですが、懐しいな」と言つたら、牧野武夫氏が「これをうちで復刊することにしましたよ、素性がはつきりしていますからね。何か書いて下さい」そこで、私の頭に浮んだのは「詩人交友記」である。この誌にはよかろう、と私は原稿を渡した。新潮社から文章倶樂部が出ていたころ、全く文倶は文学のふるさとであつた。今の文壇人でこれに接しなかつたものはなかろう。戦後派をのぞけば——。

本誌に寄せるものを書かなければ、と苦にしながら、日はどん〳〵過ぎゆく。

二

過日、朝日新聞の学藝部の人に会つたら「大いに詩を書いて下さいよ、これから盛んになりますからね」という。そこで私は「発表さへしてくれたら、ぼくも詩は書きたいですがジヤナイズムは舞台を與へませんからね」

現に私は幾篇かの詩は書いたまゝしまつてある。出版社を訪めに歩いて持ちこめは、どこかとつてくれる処もあるかも知れない。しかし詩だけは、そうしたことをしたくないのだ。金にしても千円か、二千円だし、そのために侮辱は受けたくないのである。稼ぐなら他の仕事でやりたいのが私の本心である。

文藝家協会で詩人の作品集を出すから、発表された作品を推薦してくれ、と往復ハガキで來た。しかし詩は小説と違つて、そう多く発表されていないし、私などの眼にはふれていない。この選定方法は不当であると、私は協会に申し出、せつかく詩人集を本屋で出してくれるなら、こうしたらどうか、と具体案を言つておいた。他からも意見が出ていた。協会が公平を期そうとする意図は判るが、その方法はおかしい。こんど草野心平君が協会の理事になつたが、これは詩人が推したのではなく、事務局案として提出されたのを總会で呑んでしまつただけだ。私も改まつて反対する必要もないし、そのまゝ通してしまつた草野理事が詩壇のために公平にいゝ手腕を振つてくれればいゝ。いゝ詩人にいゝ舞台を與へてやることである。発表はしないが、よい詩人がいるという小説の世界と違ふことを認識して貰いたい。今の若い編集者などそうした意欲に乏しく、情熱が足らない。出版界の嵐でカストリ雑誌も段々と姿を没し、これから立派な編集者が出てくれるだろう。

三

世の中が平常をとりもどしたら、これから詩も盛んになろうが、今の詩人はその作品にも、人間的にも大いに反省しなければならぬと思う。私も三十年近く詩を書いて來たが、自由詩には大いなる疑惑を持つものだ。今のまゝでは、独りよがりで、しかもだら〳〵とした散文とも詩ともつかぬ作品では、大衆から愛されぬのも当然だと思う。いつか大木惇夫君とも語つたが彼も同感だつた。この表現形式については後の機会に書かう。

人間的ということだが、これは今も昔も同じだといつてよかろう。フラ〳〵の軽薄人は世人から相手にされないが、詩人といふ人種にはこれが多い。詩人はもつと常識ある社会人であつて欲しいのだ。若し詩を書く故にそうなると云うなら詩はやめたがいゝ。多情多感と没道義とは同意語ではないのである

（東京都杉並區馬橋二ノ二一〇）

詩壇時報

★阪神ペンクラブ　神戸博事務局からの招待で四月八日午後神戸博を視察、終つて迎賓館で懇談会を開き四月例会とした。詩人側からは吉沢独陽、西尾牧夫、池田昌夫等出席

★喜志邦三氏　四月から神戸女学院大学に「詩学」担任

★交替改題　詩誌「交替」は四月号より「交替詩派」と改題して續刊

★藤本浩一氏　長島愛生園光田園長の傳記執筆中、光田氏少年時代の調査のため山口縣下に出張

★田中克己氏　五月より彦根大学教授として赴任し「世界史」を講ずる

★コルボウ詩話会　四月二日京都依田義賢方に例会を開き、續いて天野忠詩集「小牧歌」の出版祝賀会を催した

★稗田菫平氏　詩集「白鳥」菊版五十四頁四百部限定百円、高島高、萩野卓司序、棟方志功装幀東京日本藝業院から刊行した。

★日本詩人クラブ　正富汪洋、豊田実、山宮允三氏が発企して結成し、理事長に西條八十、専務理事山宮允、理事に正富汪洋、豊田実、柳沢健、服部嘉香、佐藤春夫、森川葵村、南江治郎、野田宇太郎、石川道雄就任した。事務所は東京都杉並區上高井戸三ノ七八六

★詩の研究鑑賞会　後沢重雄氏を中心として三月二十五日午後六時より長野縣和田村後沢方にその第二回を開いた。

★レジスタンス詩社　詩誌「レジスタンス」第四号を「九州詩人集」として出した、四六倍判六十頁、百部限定百円、原田種夫、高木秀吉、安西均富松良夫、蓁左衛門、風木雲太郎、渡辺修三、新屋敷幸繁麻生久、谷村博武、山田牙城其他執筆

★大江満雄氏　貞壁仁氏と山形縣下を講演旅行した。尚、学生向の詩誌「詩の世界」（教育藝術社発行）を責任編集して近く創刊の由

★天野忠氏　コルボウシリーズ二輯として詩集「小牧歌」菊半截六十二頁定價三十円を京都市東山區大和大路通五條下南梅屋町文童社から出した

★清原久元氏　今後の連絡は岸和田市南上町城内小学校内へ

★新体詩創始者外山正一忌　三月十二日午後一時から東京世田谷の昭和女子大学記念館に於て五十周忌記念会を催した

★現代詩講演会　四月二十二日午後一時から東京有樂町朝日新聞講堂に於て開く。北川冬彦、深尾須磨子、壺井繁治、西脇順三郎、安藤一郎、植村諦、吉田一穂、三好達治、高橋新吉、草野心平、山之口漠近藤東、藏原伸二郎、大江満雄、岩佐東一郎、江間章子、村野四郎、城左門等出演

★清水高範氏　詩集「冬と私との詩」四六判百三十頁を廣島市小町一番地廣島普樂高等学校文藝部から刊行した

★田村昌由氏　二月十八日肺炎で新潟大学病院に入院加療中なりし三兒のうち一年三ヶ月の梁子サンを一ヶ月目に喪うた

★詩誌「構成」創刊A5変型ガリ版三十頁、宮岸昭良、蟻浪五郎、如月拐呌子、磯野英子佳本光弘、吉浦洲子、刀禰昌美、綾見謙、石伏豊、餌生青人等執筆（八十円）

★プレイアド例会　四月九日午後一時より東京新宿中村屋階上に四月例会を開く

★短詩文学会　四月二日東京澁谷小川敬士方に第六回研究会を開いた

★岩間純氏　「女性詞華」を五月号より復刊。尚「地方文化」を「生活と文化」と改題して四月号から續刊した

★季刊「プレイアド」　第一輯を創刊した、西條八十、堀口大学、笹沢美明、丸山薫、三好達治、間司恒美、山本格郎大桑文藏、岩本修藏、門田穰龍野咲人等執筆（百五十円）

★詩誌「天秤」　A五倍判四頁足立巻一、亜騎保、高津和一米田透四人誌創刊。神戸市兵庫區雪御所町一七七

★橋本正一氏　大阪市旭區今市町一〇一二

★長沼重隆氏　新潟市旭町通二番丁

★能登秀夫氏　三重縣松坂市朝日町鉄道官舎八へ轉居（大鉄局松坂通信區勤務）

★吉沢比呂志氏　京都市左京區南禪寺北門前東入瑞雲庵へ

編輯後記

★本誌前号は現民謡詩界の中核をなす駿鋭十家による「純民謡特集」として沈滞せる民謡壇に喝を入れたが、果せる哉、汎詩壇的反響は絶大であり。尚連載中の平野氏の「象徴詩の研究」も絶讃を博して嬉しい。

★出版界の諸情勢は愈々緊迫し、詩雑誌の廃刊休刊續出するなかに、本誌は順次大巾に遅刊を取り戻し、今号には御覧の通り興味ある諸家の好篇を満載して江湖に見ゆる。内容に就ては一々贅言を要しない。

★最近刊行した、藤村青一の詩集「秘奥」は好評嘖々、その特殊性により大きな反響を呼んでゐる。此際の注文に対しては著者が親しく署名して送本する。直接申込みに限り送費共特價百二十円でお頒ちするから送金の上、至急申込んで頂き度い。

★五月二十五日は「則比古忌」にあたる。彼は一生を詩に生き貫いてその肉体を減ぼしたのである。当日は適当な場所を選んでささやかな追悼会を催するか、打ち揃つて展墓するかしたいと思つてゐる。

★本号が発送される頃には既に次号の編集は済んでゐる。毎月の発賣日を速めるため原稿と同人費は力めて早目にお送り願うやう

★本誌は無料廣告の依頼並に無料見本の請求等は一切お断りする。見本請求の場合は三円切手十枚同封のこと。同人以外の依頼せざる原稿の責任は負ひかねる。從つて依頼せざる原稿は「一般投稿」と見なして処理することになつてゐる。

★**詩壇時報記事募集**

全國各地の詩誌詩書の刊行。廃刊。轉居。轉任。葬祭等の身辺消息。記念会催し物の記事、写眞、ポスター其の他詩界の動勢たるべきもの一切の連絡通信を歓迎する。

★**協力同人募集**

参加希望者は、自信ある未発表作品に簡單な詩歴、職歴を添え、返信料八円封入の上日本詩壇編集所へ申込まれたし。

★**一般投稿募集**

▽種目は詩作品、評論、隨想（必ず未発表のものに限る）

▽四百字詰原稿用紙を用ひ、各篇毎に住所氏名を明記し、封皮に「日本詩壇投稿」と朱書されたい。

▽投稿は如何なる場合も返却せず、取捨選擇は当方に一任のこと。

▽締切は前々月の五日。編集所宛のこと。

★御問合せには必ず返信料を封入願ひます。

★不足税付の郵便物は一切受理致しません。

價		
一冊	四拾圓	郵税三圓
三冊	百參拾圓	郵税共
六冊	貳百四拾圓	同

定價

註文の方法

▽総て前金御拂込みのこと、但し切手代用は三圓切手一割増のこと。

▽御送金は振替、小爲替、切手代用何れかの方法で願います。

▽轉居の時は新旧住所を御通知下さい。

▽増頁による定價改訂の際には追加金を頂戴致します。

▽発行所又は編集所への御問合せは必ず返信料を御同封下さい。

昭和二十五年五月一日発行
昭和二十五年四月廿五日印刷

発行人兼編輯人　吉川桐子
印刷人　堺市北向陽町二丁六四　双輪印刷株式会社
印刷所　意島久藏

編集所　兵庫縣芦屋局區内芦屋市西山町三五　日本詩壇編集所　電話芦屋三〇九六番　振替大阪一一二三一五番

發行所　東京都杉並區方南町四〇五　大阪市阿倍野區晴明通一ノ四一　不二書房　電話天下茶屋二八〇八番　振替大阪一三五二〇番